
敷島の青い車その 6

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

敷島の青い車その6

【Zコード】

Z2475F

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

「某自動車メーカーの若き俊英・敷島は部長のいる開発部長室に駆け込んだ。」という一文から始まる“敷島シリーズ”の、まさかの第六弾。……え?「一ーズのないものを書くな」ですと…?どうせ矢車の書くものには一ーズなんですか、気にしない気にはしない。

いい加減、新しい書き出しを考えなくてはならないなあ……、と思いつつも、元来の不精ゆえにあえてこのままで行きます、と言い訳して書き出されど、某自動車メーカーの若き俊英・敷島は大和部長のいる第一開発部長室に駆け込んだ。

「部長！ 新しい動力を開発しました！」

そうやつて洋々とした顔で部屋に入った敷島を待っていたのは、難儀顔を浮かべている大和と、その大和を叱り飛ばしている男の姿だった。

「まったく、大和君。第一開発部は何をしているんだね」

そう、ネチネチと大和をいじめている、いやに丸いフォルムを誇る、見たところ60歳代の男。そして、

「まことに申し訳ありません」

と、白髪頭を搔きながら頭を下げる大和。その姿が、敷島の目に入ったのだ。

「ええと……」。敷島は、肩をすくめながら大和に声をかけた。「お取り込み中の所、スイマセン……。部長、ちょっとといいでですか」しかし、その声に振り返ったのは大和ではなく、大和を叱り飛ばしている男のほうだった。つまらなそうに重そうな体を敷島に向かたその男は、恰幅そのままの横柄な口調で言葉を発した。

「なんだね君は。こっちが今取り込み中なことくらい、社会人ならば察したまえ」

ようやく、大和も敷島の方を向いた。そして、言った。

「おう、敷島君か。どうした？」

普段の大和部長とは違い、声に力が無かつた。

その大和部長の言葉に、例の男は顎で敷島の事を誰何する。「敷島といいまして、私の部下です。開発を担当させています」と答え

た大和の言葉を聞いて、その例の男の目が光った。

「ほう……？」

顎をさすりながら、さも物知り顔でニヤニヤする中年男。その男の脇をすりぬけて大和の横に立つた敷島は、小声で訊いた。

「あの、部長、誰ですか、あのメタボリック達磨

「こ、こら！ 何てことを……。あのお方は、かしはい」

「檜原常務？」 ああ、確かに、たまたま前会長と縁戚だつたからつて、大した苦労もなく出世した方でしたつけ？

「こら！ 声が大きいよ」 大和はさらに声を潜めて続ける。 「ま、事実だがな」

その二人の「ソソソソ」とした会話に、檜原専務は妙な顔を浮かべた。 「何を話しているのだね、君たちは」

「いえいえ何でもございません」

敷島と大和はブンブンと頭を振つた。その様子に満足したのか、檜原専務はねちっこく続ける。

「さて、君が第一開発部の開発担当者かね。ちょうどいい」「は？」

意味がわからない、といった調子で敷島は声を上げる。その答えに満足したのか、檜原専務は二重顎をさすりながら、いやらしい笑顔で続ける。

「実はな、今日は大和君を叱りに来たのだ。第一開発部の業績が上がらないものだからな。だが、君のような現場の人間が来てくれて、本当に嬉しい。直に叱ることが出来るからな」

そう宣言したのを期に、檜原専務の口から叱責の言葉が洪水のようにあふれ出た。

「会社というのは遊びじゃないんだ。会社は利益を上げる場なのだから、開発費を抑えて利幅を上げる、そういうものだらう。なのに君たち第一開発部は……！ 湯水のようにお金を使う、そのくせに成果は上がらない、どういうことだね、君たちは！ 社会人としての責任感が欠如していると言われても仕方がないんじゃないのかね

！？ 別に、君たちの部署を今すぐ廃止してやつても一向に構わないんだぞ！

けれど、そんな叱責の言葉を敷島は半ば聞き流していた。敷島のような現場の人間にとつて、利幅がどうの、開発費がどうのといった問題など瑣末なものなのだ。もちろん、開発者としての責任感は持ち合わせているけれど、その責任感は“いいモノを作る”という程度のものでしかない。

だが、敷島の横で俯きながら話を聞いている大和は、実に沈痛な表情でいちいち権原専務の言葉に頷いている。

そして、そんな叱責が終わつたのを見計らつて、敷島は大声で言った。

「あの！ 新しい動力を開発しましたけど……」

「なに？！」

大和部長と権原専務が、ほぼ同時に敷島の顔を覗きこむ。

「いや、僕だつて開発者ですから。新しい動力を開発したんですよ」「ほう？ なるほど？」反応したのは、権原専務だつた。「その新動力とやら、見せてもらおうか。困るんだ、これ以上第一開発部が口クでもない開発に現を抜かしている状況は。……君たちの不振が、私のような専務の給料にまで響くのだ。そして、関係ない私の評価にまで響くのだ。だから、君の新開発とやらを見せてもらおうか」

そう苦々しく吐き捨て、権原専務は先に部屋から出て行つてしまつた。

ドアが閉まつてから、大和はため息を一つついて言つた。

「ま、部下の発明を見るのは、上司の勤めだからな。それに、あんなに的を射ない説教を聞くよりは、君の的を射ない新開発を見るほうがはるかに面白いからな」

試験滑走路。

その上に佇む青い車に乗り込んだ3人。敷島が運転席、大和が助

手席、樋原専務が後部座席に座っている。樋原専務はしきりに、「狭い」だの「汚い」だのと言っているが、この際スルーすることに決めた二人なのだった。

「で？」樋原専務は突然訊いてきた。「この車は、どういうものなのだね。『新開発』のことだが、どういうことだね？私は専門が理系ではないから、文系の人間にも分かるように説明してくれたまえ」

まるでどこかの国のマハラジャのようにざつかりと座席に座る樋原専務に、敷島が応じる。

「ああ、僕の作る動力は、『人間の感情の周りに蠢くエネルギー』を使って動くものです」

「に、人間の感情？」

「はい。人間には感情があります。その感情というのは、常にエネルギーをまとっているものなんです」

「しかし、眉唾な話だな」

「それは、専務が文系思考の方だからです」と、ちょっと皮肉を込めて敷島は続ける。「ガソリンに火をつけて走る仕組みだって、100年前には奇抜な発想だつたはずですよ」

敷島は、ヘッドギアをかぶった。

「このヘッドギアから、感情エネルギーを取り出します。もちろん、人間に害はありません」

その説明に、大和が口を挟んだ。

「今回は、どういう感情で動くんだね」

「今回は、すばり『责任感』です」と、敷島は答えた。

「仮に、感情のエネルギーで車が動くとして、なんだが」と、薄氷の上を渡るような口調で、樋原専務が聞く。「それを使ってしまうことで、『责任感』が消滅してしまうようなことはないのかね」

その質問に、やれやれ、といった趣で敷島は続ける。

「大丈夫です。例えば、水力発電、つてあるでしょ？ あれは水の持つ位置エネルギーを取り出す仕組みなわけですが、あの発電で

水が失われる」とはないでしょう？　水力発電で失われているのは水そのものではなくて、あくまで“位置エネルギー”なんです。それと同じことです

「ふ、ふふん？　な、なるほど」

きっと、今の受け答えを見るに、権原部長はよく分かつていないのでどうが、あえて無視を決め込む敷島なのだつた。

「ま、能書きはいいから、早く走りまたえ」

「はい」

敷島は、アクセルを踏んだ。すると、青い車は時速40kmくらいの速度で試験滑走路を走り始めた。

「おお！　走つた！」

後部座席で声を上げる権原部長。窓の向こうの景色が、ゆっくりと後ろに流れる。

「でも、ちょっと問題がありまして」と、敷島。「実は、これがスピードの限界なんです。こうやってお見せする前に、試験運転をしてみたんですが、最高速度が45kmなんですよ」

「それは困った話だな」と、大和。「それでは実用化も出来ないではないか」

一旦車を停めた敷島は、おもむろにヘッジギアを脱いで、大和部長に手渡す。

「じゃあ、今度は大和部長がヘッジギアをかぶつてください」

「ああ……」

今度は、大和部長がヘッジギアをかぶり、運転が再開された。すると……。

スピードメーターがかなりいい線まで回るようになり、窓の外で流れる風景も、前よりはるかに速くなつた。

「おお、随分速いな」

と、心なしか嬉しそうに前方を眺める大和。敷島が解説を加える。「感情からエネルギーを取り出すというのは究極のクリーンエネルギーですけど、一方で個体差がありすぎるのが難なんですね」

「ほつ、つまり」。と、樋原専務は一やり顔で続ける。「责任感で走るといつこの車、つまりはそのヘッドギアをかぶった人間の“责任感”の総量が分かるというわけか。部下を昇進させる際の参考になるやもな」

敷島は、またもや車を止めた。

「では、今度は樋原専務、ヘッドギアをおかぶりください」

「私が、か？」

「もちろん」

「私なら、それこそメーターを振り切つてしまつほどの責任感を持ち合わせていいから危険だよ」

真顔でそう宣言する樋原専務に、大和はヘッドギアを差し出しながら言葉をかける。

「いえいえ。この車にはブレーキもついていますから

そうやって、半ば、無理矢理にかぶせてしました。

「では、走りましょうか」

そう言って、敷島はアクセルを踏んだ。だが。

ピクリとも動かない。まるで、岩になつてしまつたかのように、まるで動かない。

「なんだね、故障かね」

「そんなはずはないです」と、敷島。「すいません、専務、ヘッドギアをお返しください」

そうして返してもらつたヘッドギアを敷島がかぶり、アクセルを踏んでみると、青い車は45Kmで動き始めた。

「……」

「……」

無言で顔を見合わせる樋原専務と大和部長。樋原専務は心なしか気まずそうで、大和部長は果てしなく疲れた中年の顔を樋原専務に向けている。

その様子を横目で眺めながら、“この会社、見切りをつけたほうがいいのかなあ”とふと思つう敷島なのだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2475f/>

敷島の青い車その6

2010年10月8日15時44分発行